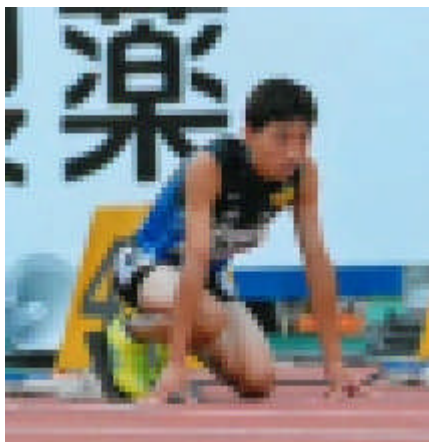


第42回全日本中学校陸上競技選手権大会

(8/18~21 北海道 札幌厚別)RESULTS

男子110mYH 予選2組	堀本 薫	15秒19 (+1.8)	7着
男子四種競技	神原 大地	2654点	7位
110mYH	14秒95 (+1.5)	856点	砲丸投 12m11 613点
走高跳	1m65 504点	400m 53秒01	681点

- 『咲き誇れ！北で夢見し 絆の華よ』の大会スローガンのもと、今年の中学生のトップアスリートたちが北の大地、北海道札幌市厚別公園競技場に集結した。個人的には12年前の記憶が鮮やかによみがえる場所でもある。2003年の北海道全中（当時、茨木西）では、女子4×100mR、女子三種競技B（この年まで実施。走り幅跳び、砲丸投げ、ハードル）女子100m、女子走り幅跳び、男子3000mに出場。三種競技Bで日本一、ウィッシュマン賞（当時は三種競技A、Bの男女それぞれの優勝者4名のうちから最優秀の者が受ける賞）を獲得した思い出深い地である。実はその日本一より、近畿大会で優勝し当時のランキング3位で優勝候補とされていた女子リレーチームが、2走、3走間でまさかのバトン落下、準決勝敗退したことの方が強く印象に残っている。涙が涸れるまで泣き続けた選手たち……。あの場面がつい昨日のこのように思い出されるのである。
- 今年も2人の選手を連れてくることができた。男子四種競技の神原、そして男子110mYHの堀本である。新千歳空港からJRに乗り新札幌駅で下車。駅前でさっそく札幌ラーメンをいただく。明日以降、選手はまともな昼食を摂ることができないので、ささやかな喜びとなった。タクシーで移動して厚別公園陸上競技場へ。すぐに調整練習に入るのだが、小雨まじりのあいにくの天候。Tシャツ1枚では過ごせないほどの寒さであった。それでも2人とも準備万端、ウインドブレーカーを着てアップ開始。さすがに全国の大舞台。聞き慣れない方言があちこちに飛び交い、みんな強そうに見えてしまう。



緊張感がないと言えは嘘になる。昨年の秋に横浜でのジュニアオリンピックを経験している堀本の方が平常心に近い状態であった印象を受けた。長い故障を乗り越えて、何とか全国切符を手にした堀本のハードルのアプローチの動きを見て、「今シーズンで一番いい動きをしているよ」と、声をかけた。お世辞ではなく、本当にそう思ったのだ。「自己新記録は間違いないね」と、声をかけると堀本は力強く「はい！」と返事をした。神原はハードルのアプローチ練習のあと、砲丸投げピットでサークルを入念

にチェック。冷たい雨を避けて早い目に練習を切り上げた。



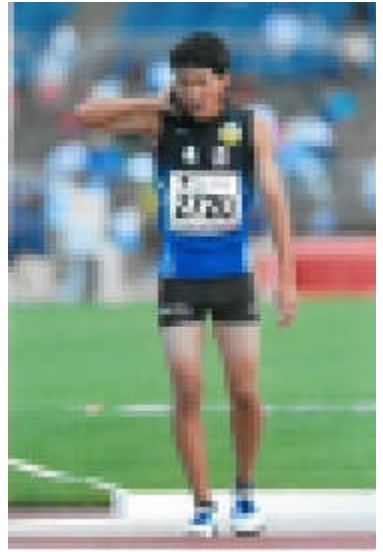
- 大会初日。朝5時に起床。5時30分過ぎから散歩がてらに宿舎の近くのコンビニで買い物をする。6時20分過ぎにはホテルを出て7時前には競技場に到着。男子四種競技の最初の種目110mYHは9時45分競技開始。朝早くから動き出さなければ体は動かない。朝一番から、本競技場でハードルのアプローチ練習を繰り返す。低い姿勢で1台目に入ることができれば、接地の局面がうまくい選手なので100m11秒7台のスプリント力で、ハードルを越えるたびにスピードが増していくはずだ。1台目で踏み切りが近くなって、体が浮いてしまったり、抜き足をぶつけて失速したりすることはどうしても避けなかった。1台目までの8歩の刻みにどうしてもナーバスになってしまうのは仕方のないことである。ややぎこちない動きもあったが、クレバーで修正できる能力を持った選手。信頼して選手招集所へ送り出した。

- 110mYHの2組6レーンに神原が登場する。メインスタンドで堀本と2人で神原の動きを見守った。強い向かい風で有名な競技場であるが、ホームストレートには緩やかな追い風が吹いていた。ハードルが得意種目だけに胸をなでおろした。スターターのピストルが鳴った。神原のアプローチが万全でないことがすぐにわかった。ややアプローチが遅れた。それでも3台目くらいから加速に乗りだした。今大会ランキングトップの8レーンの選手がぐんぐん前が出る。神原は他の3選手と2番手でほぼ横1線。大阪ではいつも独走になるのだが、さすがに全国大会。レベルが高い。1着で8レーンの選手がフィニッシュ。速報のデジタルタイマーは『14:57』と標示されていた。単独種目でも予選通過できるような素晴らしい記録であった。やがて正式記録が電光掲示板に標示される。神原は2着。初の14秒台となる14秒95の自己ベスト。追い風1.5m。この記録を見て隣にいた堀本の目つきが変わった。彼の今シーズンベストは14秒94。「絶対、北海道でベストを出してやる！」と決意をさらに強固なものにしたに違いない。

- 「アプローチがうまくいかなかった」神原も同じ感想であった。彼は1種目めで856点をゲットしたことになるが、この記録でも出場者27名中5番目の記録となる。どの選手もこの大舞台を迎えるにあたってレベルをまたひとつあげているのだ。大阪の陣地にも



どって体のケアと軽食を摂らせる。ほとんど休む間もないまま、すぐにサブトラックの投擲練習場へと向かった。2種目めは砲丸投げ。ある程度の記録を残すには投げこみが必要だと感じていた。1本でも多く投げこみをする事で、12m50の目標をクリアしたいと考えた。



- 投擲練習場では四種競技の選手だけではなく、明日の砲丸投げに出場する選手も大勢いた。とても中学生とは思えないほどの大柄な選手の中にあって、神原の体がより小さく見えた。確かに中学陸上は早熟な選手が有利である。筋力も早くつけてパワーアップした方が競技パフォーマンスも確実にあがる。しかし、中学生は成長途上である。そのことを踏まえ、長い目で見て選手を育成する必要がある。もちろん、勝利至上主義であってはならないし、まずは人間教育が優先されなければならない。そういう観点において、神原の全国大会出場は感慨深い。入部したときの走力は同じ学年に中長パート以外が15人いたが、100mの記録は後ろから数えて3番目。そこからスタートした選手である。「(中体連の強化選手でもない)僕が、強化練習会に入れてもらってもいいんですか？」と目を輝かせていたのが今年の2月。スプリントの基本の技術を身につけたことから、その技術がハードルに走り高跳びに、そしてこの砲丸投げに見事に活かされているのだ。4kgの砲丸を投げるのも、見事に地球の中心と自分の体の軸がうまくマッチしている。鉄球が12mを越えるのを確認して投擲練習を終えた。

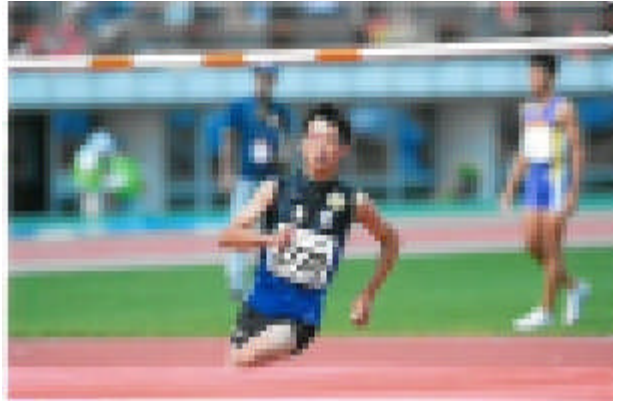
- 14時00分競技開始、男子四種競技砲丸投げ。神原は1組の第13投擲者となる。とにかく1投目の投擲に集中したい。この1投目でまずまずの記録を出すと気分的にずいぶん楽になるからだ。彼のベスト記録は12m05。迎えた1投目。鉄球は12m付近に落下した。記録は11m84。まずまずの記録である。12m50のイメージができた



たと内心喜んだ。ところが、2投目は完全にバランスを崩してしまって失敗。10m62の記録に終わる。「もったいない……！」心の中でつぶやいた。次の3投目の順番がまわってくるまで、ずいぶん長く感じられた。いよいよ3投目。自分まで緊張している。グライドの姿勢に入る前に「投げま〜す！」と、大きな声。「はいっ！」とこちらも力強く返事をする。鉄球が大きな放物線を描いた。12mのラインを越えたのが肉眼でも確認できた。記録は12m11。わずかであるが、この種目も自己ベスト。613点をゲットして、2種目を終えた時点で暫定総合7位という順位で1日目を終えた。ホテルでは早い目に就寝するように指示したが、きっと気持ちが高

ぶったまま床についたはずだ。

- 勝負の2日目。この日は堀本の110mYHの予選もあるために、忙しい一日となった。この日も朝7時から本競技場でアップ開始。まずは堀本のハードルのアプローチ練習に付き添う。今シーズンで一番いいイメージは変わらない。そのあと、神原の走り高跳びの跳躍練習をチェックするために慌

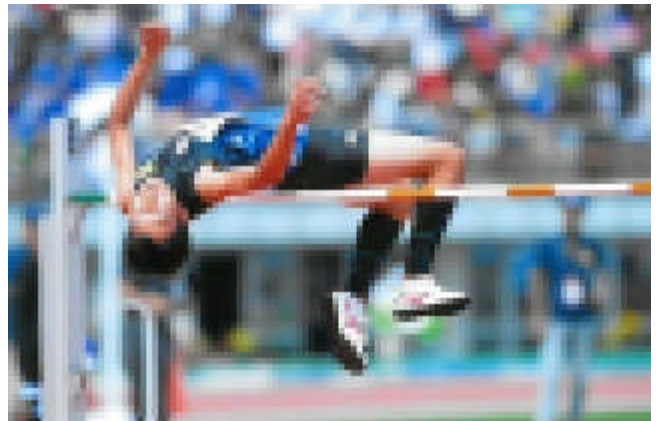


ただしくウォームアップ場へ移動する。四種競技の選手たちが何度も跳躍練習を繰り返している。神原の跳躍を見て、正直「あまり良くない」と感じた。高く跳びたい気持ちがあるが、踏み切りで必要以上に強く地面を押そうとしている。しかもクリアランスで高さをかせぎたいという気持ちが強いので、早く空中動作に入ってしまう、軸でもらう反発を消してしまっているのだ。「助走でリラックスして、踏み切りで真上から地面をシンプルにミートするイメージで！」とアドバイスした。彼は必死で戦っている。はやる気持ちがあるが当然。その気持ちをうまくコントロールしようと、また戦っている。スポーツの勝負というのはきっとそういうものだと思う。

- 9時20分競技開始、男子四種競技走り高跳び。神原は2組で第2跳躍者。もともと走り高跳びが専門の選手であった神原であるが、今となってはこの種目に一番苦労している。彼のベスト記録は1m70。5月の三島大会で出した記録で、しかもこのときの1回しか跳んでいない。セカンド記録は1m68で、この高さは彼の身長とほぼ同じになる。公式練習をサイドスタンドで見守ったが、このときのイメージもあまり良くなかった。彼の修正力に賭けるしかないと感じた。最初の高さ1m53はパス。1m56からの挑戦となった。見守る1回目。リラックスした助走から踏み切って…と思った矢先にその踏み切り局面であろうことかつまずいてしまい、そのまま前のめりにマットに転んでしまったのだ。お決まりのように審判の赤旗があがる。「全国大会には魔物が棲んでいる」の言葉があるが、普段ではあり得ないことが起こるのだから、魔物のせいなのかも知れない。続く2回目の跳躍。体はバーの上を越えたが、ふくらはぎでバーを当ててしまい、また赤旗。まさか…、まさかの展開となった。もう後がない。次に失敗すると記録なしに終わってしまう。2種目連続して自己ベストをマークしたのに、記録なしに終わってしまうと、すべてが水の泡になってしまう。「このままでは大阪に帰れない…!？」不安が襲ってきて冷静さを失いそうになった。



祈るような思いで見つめる3回目。見ているだけで胸がはりさけそうになるのだから、実際に跳躍を開始しようとする本人の胸中はどうなだろう。大混乱しているに違いない。それでも、自分を信じ切ることでしか道は切り拓かれないことを彼はよく知っているはずと、こちらの方も開き直る。右手を高くあげて「跳びま〜す」の声。「はいっ！」と大きな声で返事を返す。内傾のカーブから勢い良く踏み切り、彼の体が宙に舞った。バーには触れず審判の白旗が上がった。とりあえず胸をなでおろした。続く1m59は1回目でクリア。ここから調子をあげていきたいと思った1m62。ところが、ここでも跳躍がはまらない。1回目、2回目とバツ。後がなくなった3回目。ここで失敗すると入賞圏外になってしまう。細かい技術的なことをあれこれ指摘するより、自分の体に染みこんでいるはずの良い跳び方を思い出すことが先決と、コーチングボックスから敢えて声をかけることはしなかった。3回目。彼の体が大きく宙を舞った。バーの上を余裕を持って越える完璧な跳躍であった。審判の白旗が高々とあがった。「いいぞ!!」と大きな声をかけて拍手をした。この土壇場で今日一番の見事なジャンプを見せたのだ。バーは1m65に上る。先ほどのいいイメージの跳躍を続ければ大丈夫と思っていたが、その好調さが続かない。この高さも3回目に何とかクリア。まさに薄氷を踏む戦いとなった。この高さまで無効試技が6回。こんな出入りの激しい神原は初めてであった。バーの高さはいよいよ1m68にあがる。この高さをクリアすると、入賞が現実味を帯びてくるはずだ。この高さも1回目、2回目と赤旗があがる。注目の3回目。踏み切りのタイミングもよく思わず「やった！」と声をあげてしまったほどだったが、わずかにふくらはぎがバーに触れて、揺れながら無情にもバーが落下した。結局、記録は1m65。504点を獲得するにとどまった。



- 次は堀本の出番である。12時前にウォームアップ場に向かう。ハードルの選手がすでにたくさん居て、何度もいねいにアプローチ練習を繰り返していた。スタプロをセットしておこなう選手がほとんどなので、順番待ちの時間はやたら長くなり、覚悟はしていたものの焦れる自分がいた。堀本は対称的にこんな場面でもあせらずマイペースで大物ぶりを発揮していた。長い故障を乗り越えて土壇場でつかみとった全国切符。突貫工事で何とか間に合わせたので、やり残してしまったことがたくさんあるのはやむをえない。まずは自己ベスト(14秒94)を更新する記録で予選を走ることが目標となる。「1台目のアプローチでうまくスピードに乗れば、後半のハードルはどんどん詰まりだすはずだ。しっかり(インターバルを)刻め！」とアドバイスして選手招集所へ送り出

した。

- 13時15分競技開始。110mYH 予選開始。全部で9組あって各組の2着と、3着以降の上位6名が大会3日目におこなわれる準決勝進出となる。堀本は2組9レーンに登場する。レース直前のアプローチ練習も技術的には何ら問題がなかった。もともと癖のないハードリングができる選手である。身長は1m80cmと高く手足も長い。体が大きいがまだまだ



成長途上で、体もまだできあがっていない。筋力が不足し、しかもアンバランスなどところがあるのに、全国レベルの選手に成長している。つまりは将来性豊かな選手なのである。これでスプリントカが身につけば、きっと日本のトップハードラーに成長するに違いないはずだ。去年のジュニアオリンピックや、今回の全国大会の経験が必ず大きく生かされる日がやって来る。だからこそ、結果にとらわれることなく、今をしっかりと戦わせたいと考えていた。スターターのピストルが鳴った。勢いよく飛び出す9人の選手たち。堀本の1台目のアプローチは及第点。悪くはないが、さすがに全国大会。自分より前に行く選手に少々あせりを感じたとしても不思議ではない。5台目以降の後半部分、ここからが彼の真骨頂で前にどんどん出ていくイメージがある。シードレーンの選手との差が大きくなった。そのままなだれこむようにフィニッシュ。1着の選手のタイムは14秒28。素晴らしい記録である。正式記録が大型映像で発表された。堀本は7着。15秒19。追い風1.8m。「決して悪いレースではなかったよ。ただ、14秒台が出なかったのが残念だったね。」と、レース後に声をかけると彼も悔しそうな表情であった。この全国の大舞台でのレースまでに、実戦を踏む場数の絶対数が少なかったことが一番の敗因であったと分析している。この悔しさを秋のジュニアオリンピックに思い切りぶつけてもらいたい。



- 神原が疲れていると感じた。普段、あまり足が痛いと訴えることの少ない選手であるが、小西トレーナーのマッサージを受けた方がいいと判断した。初めての全国大会。精神的な疲労もかなり蓄積しているはずだ。400mのアップは必要最小限にとどめることにした。本人もウォームアップ場での時間を持て余しているようで早い目にアップを切り上げた。選手招集所までの道すがら、「先生、リスがいますよ」と木の上の方を見上げた。この厚別公園は蝦夷リスが生息し

ているのだ。自分たちがのどかな北海道の風景の中にいることを再発見した。考えてみれば、この2日間朝は5時に起床、早くから競技場入りして陸上一色。自分たちが北海道にいることの実感はこのリスを見るまでまったくなかったかも知れない。とにかく、目の前の4種目の競技に最善を尽くすことしか考えていなかった。長い2日間の戦いがもうすぐピリオドを迎える。「大丈夫なんですけど、ふくらはぎが気になります」と神原。まだ時間があったので、もう一度大阪ベンチに引き返して、小西トレーナーにテーピングを施してもらう。「攻めのレースを心がけて最初の200mに集中しろ!」と、声をかけて選手招集所へ送り出した。

- 16時15分競技開始。男子四種競技の最終種目400m。3種目を終わったところで神原は8位。混成競技の最終種目は記録上位者を基準に番組編成されるので、神原は最終組の9レーン。この組の9人が3種目時点の上位9名となるので、この組から優勝者が出るのは間違いない。神原の400mのベストタイムは52秒61。52秒台前半の自己ベストをイメージして、この大舞台にのぞんでいるはずだ。スタブロをセットして、短いダッシュを入れる神原の走りを見て「きれいな走りだ」と感じた。無駄な力が入らない、正確な接地技術で効率良く前に進む。自分が教えてきたスプリントのスキルを見事に体現している。中学に入って陸上部に入部した頃から今までを思い返していた。2年の秋には「先生、四種競技で全国大会に行くにはハードルが15秒0くらい、砲丸投げが…」と、すでに得点計算をして楽しそうにイメージしていたのが昨日のことのように思い出された。全国から参加標準記録を突破して、この北海道にやってきたのがたったの27人。全種目の中で一番少ない参加人数である。その中でひときわ体の小さい神原がこの最終組で走ろうとしているのだ……。



運命の号砲が鳴った。スムーズな加速で前に出る2レーンの神原。すぐ外側の3レーンの選手に追いつく勢いである。バックストレートも早い接地で駆け抜ける。第2曲走路に入って5レーンと4レーンの選手が前に出た。一番外側、9レーンの選手にも勢いがある。最後のバックストレート。もう一度、ピッチを上げようとする神原。最後はどの選手も気持ちで走っている。神原が倒れこむようにフィニッシュ。1着の速報は52秒06と表示されている。やがて大型映像で正式記録が発表された。神原は4着、53秒01。この種目で681点を獲得した、手元の計算では合計2654点。わずか10点であるが、自己ベストを更新したことがわかった。

- 神原が帰って来ない。さらには四種目を終えての総合順位の結果発表もない。8位以内に入って入賞すると、9位以下になるのでは雲泥の差となる。大型映像の画面が切り替わるたびに、目を凝らすがお目当ての四種競技の総合結果が出ない。この待っている

時間がやたら長く感じられたのだ……。

やがて結果発表。神原が2654点で7位入賞したことが判明した。今大会の表彰セレモニーはメインスタンド上方のバルコニーでおこなわれる。2日目の最終種目が終了後、「凜んぐトゥルー」の音楽（ジュニアオリンピックの表彰セレモニーの音楽です!!）が流れて、四種競技のセレモニーが始まった。そのようすは大型映像にも映し出されていた。「神原、おめでとう〜!」と叫んで、拍手もいっぱいした。8人の選手の表情がとても素晴らしかったのが印象に残っている。このセレモニーが終わると、今度は競技場の正面玄関前に降りて来て、特設の表彰台の上で8人の選手がもう一度勢揃いする。顧問や保護者、関係者が集まり選手を間近に見ての記念撮影会となる。混成競技の選手が羨ましく思えた。みんなとても仲がいいのである。2日間、四種目を戦い抜いた者どうしにしかわからない連帯感がある。この北海道で初めて出会ったとは思えないほど打ち解けているのだ。優勝者から順に鹿児島、鳥取、秋田、岡山、東京、福岡、大阪、埼玉とみんな住んでいるところが違うので、いろいろな言葉が飛び交う。スポーツの素晴らしさを改めて彼らから教わったのだ。感謝の気持ちでいっぱいになった。

- 中学生のトップアスリートによる3日間の激戦が終了した。日本一を目指して極限の戦いを繰り広げた選手たち。そこには栄冠があり、歓喜があり、敗北もあり、失意もあり、さらには感動もあり、そして決意があり、新たな次なる夢への挑戦があったはずだ。スポーツの結果は冷酷であるが、真正面から夢に果敢に挑戦した者にしかわからない感動がある。この夢舞台を盛りあげた主役はもちろん選手であるが、それを支える裏方に徹した大会の生徒役員の動きも強く印象に残っている。大会終了後、ごみを回収している北海道の中学生に「大会中はお世話になりました。北海道ありがとう」と、声をかけると「こちらこそ、ありがとうございました。北海道はとってもいいところですよ。おいしいものたくさん食べて帰ってくださいね」と、笑顔。何だかとっても幸せな気分になって、北の大地の青い空をもう一度見上げた。空気がとってもおいしかった。

